289-Ta47-2ウ
1200500732478

贈正四位蘭學の泰斗高野長英先生碑文を讀む

大能淺次郎

始

289
TA47
2

筑紫史談第八拾壹集 昭和十七年五月廿五日發行 拔刷

贈正四位 蘭學の泰斗高野長英先生碑文を讀む

大熊淺次郎

贈正四位

蘭學の泰斗高野長英先生碑文を讀む

福岡　大熊淺次郎

史談前集拙稿の「嘉永六年露國使節プーチャチン長崎渡來幕閣の折衝、福岡藩に關する遺聞補正附高野長英の蘭學と福岡藩侯の關係」の稿末の一節東都青山善光寺內建つる所の碑前の感懷を叙する所あり。此碑石長大刻する所の文字一千二百五十七字、老眼の能く之れを讀むこと難澁を極め、臺石に登ぼりては視線を上下轉廻すること幾十回、漸くにして讀了するを得たり。我寓舍の金杉勳を介して之れを謄寫せしめ、更に對照驗校誤りなきを期したり。

長英は文化元年五月五日陸奥國（今陸中國岩手縣）膽澤郡水澤城下に生れ、伊達家の陪臣たり、碑文に在る如く本姓は後藤氏なり、父は總輔と云ひ母の伯父高野玄齋に養はれて嗣となり、高野氏を稱せり。這般偶々相識れる海洋少年團生みの親たる原道太海軍大佐より消息あり。大佐書見に篤く卑稿を讀み去り、云へらく高野先生は後藤新平伯と同藩同郷の所生たり、殊に長英の家とは肉親の間柄として能く長英の人物行蹟を語ること詳密、常に先生を推稱せられ、時に汽車中抔にて屢々自慢話を聞きしとの思ひ出でを申送られしは珍とせし所、扨ては長英と明治朝の後藤新平伯とは近親の緣戚たるを知り、親たるなり。余亦伯の警咳に接したる一人として伯に親炙し、鄙ある人物の系統を知るは、修史上頗る興味を感じたるものなり。

後藤伯弱冠にして醫學に志し東都に遊學せり、一旦郷に歸るや恩人安場保和の福島縣令たるに從ひ福島に赴き、須賀川醫學校又は福島洋學校に學び、爾來轉轍學業を積み立身の基を開かれたり、後年の伯の官歴偉大の功業を追想し、高野の因緣に想到し來れば轉た今昔の感深からざるを得ざるなり。

畏くも明治朝戊戌（明治三十一年）の歳高野長英の生前譯著の功を追褒せられ、贈位恩典の特旨を蒙る。此碑は乃ち舊閥の榮譽として、仙臺の人相謀り、此處因由の舊蹟青山百人街今の青山北町六丁目善光寺內に建て、後世に顯彰したるものなり。篆額は舊仙臺藩主家第三十世伊達宗基伯の筆書に係かり、碑文は海舟勝安芳伯の撰作たり。伯は文政六年江戸本所龜澤町に

930
116

生れ、長英よりは十九歳の年下なるも、同時勢の潮流に棹し、弱冠にして蘭學を我福岡藩侯江戸藩邸蘭學儒員として長英にも使せし永井青崖に學び、泰西の新智識を求めては海軍兵學の魁をなし、維新の功臣としては大西郷と共に盛名を馳たる俊傑たり。氷川清話に據れば海舟伯は長英とは相識の間柄にして有識の士と推稱せられ、碑文の劈頭に現はれたる横谷宗興（横谷宗興と云へるは、京都の彫金師寛永年間江戸に來り德川氏に仕へたる名匠、元祿三年に歿したる人、此の横谷は時代を異にするも同一人名なれば之は姐めて歴世子孫の襲名なるべきか）は勝の知れる人にして長英の自盡の一ヶ月前に當り、之の宗興の紹介により、夜中勝の家を訪ひ來り時事を談じ、歸るに際し拙者は潜居の身分何物も呈すべきなし、只志すもの之れなりとて、長英自から謄寫したる荻生徂徠の「軍法不審」の一書を惠み去れり、此他長英との逸談もあり。勝伯は實に長英との舊知たるを知られ、碑文の中に、前事あり文を石に索むとあり、其撰作の由て來る所、良に故ある哉と首肯せられたり。斯かる名臣鉅公の題額撰文によりて碑面を飾りたるは、高野長英身後の輝きとして將た我國文化の開發者として創譯遺功の存ずる所永久傳はるべきなり、誠に欽仰に堪へざるなり。今之の碑文を左に收錄せり同好諸彦の一讀を給はらば幸甚なり。（便宜句點並に返點を附す）

正四位伯爵　伊達宗基篆額

從二位伯爵　勝　安芳撰文

嘉永庚戌之秋。横谷宗興夜竊拉二偉漢一來。圓顱隆準眼光炯々額有二火瘢一。宗興低レ語曰是高野長英也。曩説二外事一獲レ罪禁錮不レ勝二幽憤一。乘二火災一晦レ跡七年。近日追踪稍逼。欲下賴二君高義一以託中一身上也。余曰先生寃枉天下知レ之。然我爲二公方旗下臣一。庇二其罪人一所レ不レ能レ爲。但今夕之事誓不二他言一矣、二人謝去間一月。道路喧傳。脫レ獄者高野長英變二姓名澤三伯一。匿二于青山百人街一。捕吏偵而圍レ之。長英取二匕首一刺二一人一傷二一人一。自亦絶レ喉而死。余聞レ之泫然事如二昨日一。今則星霜且五十。今茲戊戌七月朝廷追褒先生創譯西洋兵書之功一。特贈二正四位一。先生招レ禍亦在二戊戌一。周甲而洛二此恩典一。是所謂榮辱若驚者歟。仙臺人士相謀建二一碑于青山善光寺一。以傳二其榮一。知二余有二前事一索二文其石一。乃據レ狀先生諱讓字長英號二瑞皐一。奥州膽澤郡水澤人。本姓後藤氏出承二高野氏一。俱爲二邑主伊達氏世臣一。考諱實仁稱二摠輔一母高野氏。年十四爲二外舅玄齋嗣一。玄齋曾學二杉田玄白一唱二和蘭醫方一。文政庚辰先生遊二方江戸一。主二鄕人神崎源造一入二吉田長叔門一勉學五年。謂泰西醫術非レ精（シボルト）通横文一則不レ能レ究二其眞理一也。當二是時一和蘭醫員椎富多來二長崎一。博聞多識從遊甚多。先生亦往學專力二文辭一兼通二其言語一云。和蘭甲必丹五歳一貢二江戸一。丙戌例貢椎富多隨レ焉。天文方高橋作左就詢二歐洲形勢一。密酬以二日本地圖一。事屬二國禁一。至二戊子八月一發露。先生見レ幾風避之二薩摩一待二事平一。遊二廣島一前一年玄齋歿。門人小野良策千里奔レ訃。以二先生去後一姑候二江戸一既而傳二此消息一。後至二廣島一相誘東歸。先生途謂僻境賣レ藥丈夫所レ不レ屑。良策責以二忠孝之道一。先生曰立レ身行レ道揚二名後世一不二亦孝一乎。賦二一絶一曰。學術走二西域一。雙眸略二五洲一。看吾成業後。天下仰二餘流一。遂留二江戸一稱レ疾致仕。是歳天保紀元也。幕府醫官松本良甫勸唱二新醫術一。先生及レ撰二醫原梳要一。始説二生理緝述避疫要法産科提要徵痘摘要一歳荐飢又著二備荒二物考一。此他有二和蘭史略奇器集成等一。先生機敏活達其蟹行之書隨レ讀隨筆。譯文之妙當時無下出二其右一者上。醫事亦精然。有二酒癖一醉則嘲罵。一世不レ爲二儕輩所一レ容。特與二小關三英渡邊華山等一友善。時長崎傳レ警英吉利戰艦來。朝野駭愕物論百出。華山著二愼機論一先生作二夢物語一以述二英國々勢一。監察官鳥居耀藏每惡下唱二蘭學一者上。欲二待レ隙排一レ之。明年己亥有レ人密告下有中航二無人島一者上。耀藏以爲二奇貨一俄起二黨獄一。華山先被レ捕三英自盡。先生知レ不レ可レ免自首。而訊問再四無レ有二證左一。終以二濫説二外事一成レ讞。十二日錮二華山其藩田原一。先生恐二累及二舊君一自稱二庶人一。故以永禁二囹圄一。於レ是述二遭厄小記鳥哀音二篇一以白二心事一。在レ囚五年會獄後失レ火。法放二囚徒一三日使二自歸一。先生不レ歸疾行赴二故鄕一省レ母謝レ罪。而變二稱伊藤隨溪一。初宇和島侯讀二夢物語一深景二慕其人一。侯臣松根内藏與二先生門人内田觀齋一有レ舊。至レ是觀齋乞二庇隱一侯容レ之携還二其國一。數託二遊獵一相見郊外一居歳餘。先生潛復歸二江戸一塗二硝精于額一易二其面貌一。先レ是海警頻臻上下爭講二泰西兵法一。宗興與二松下健藏等一謀。査二先生譯述三兵答古知幾一。薩摩侯一見激賞示之伊藤玄林一。且驚且怪曰修二和蘭學一者多矣。然善讀二此等書一者海内只有二高野長英一耳。不レ知彼尚在否。事漸洩先生竟至レ見レ害。實嘉永三年十月晦也。時四十又七。

嗚呼先生殞レ命在二此三兵之書一。而揚二名於後世一天下仰二餘流一。以受二今日贈典一亦在二此三兵之書一。榮辱之數果可レ驚也。若夫昇平三百年鎖國自守。言苟及二海外一有レ妨二内治一。是以先二先生一而得レ罪者有二林子平高橋作左一。後二先生一而遭レ厄有二高島秋帆佐久間象山一。究二其心事一無二一不レ出二于憂國之餘一。然當時政略不レ遠レ省二其情狀如何一也。爾來世運一變以至二今時開明一。是豈得レ無レ非二先輩數子殺身成レ仁遺烈一乎。然則昔日罪人今日忠臣俯仰唯一大息耳。

澤木三郎氏稿「松林飯山概傳」の參照として「飯山文存」載する所の飯山の弟松林義規子則の輯錄「飯山松林君年譜」を餘白に抄錄することゝせり。（大熊生）

二月生二于筑前早良郡飯盛山下一。

天保十年己亥　君生　一歳
弘化四年丁巳　君　九歳
嘉永三年庚戌　君　十二歳
嘉永五年壬子　君　十四歳
安政三年丙辰　君　十八歳
安政四年丁巳　君　十九歳
安政五年戊午　君　二十歳
安政六年己未　君二十一歳
萬延元年庚申　君二十二歳
文久元年辛酉　君二十三歳
文久二年壬戌　君二十四歳
文久三年癸亥　君二十五歳
元治元年甲子　君二十六歳
慶應元年乙丑　君二十七歳
慶應二年丙寅　君二十八歳
慶應三年丁卯　君二十九歳

隱二家鄕一來二大村一住二鯛浦一。始謁二大村侯一、講二唐詩一、賜二俸一口一入レ學。奉レ命到二江戸一、受二業於安積艮齋一。作二豐太閤大塔皇子等史論十餘篇一、又論二日本外史體裁之失一。入二昌平黌一、爲二詩文掛一、作二林子平畫像記一。作二校正蒔論譜序一。

三月歸二大村一、給二祿六十石一、爲二五教館教授一、因辭、乃爲二學頭一、作下遊二千綿溪一記上。八月、乞レ暇遊二學於浪華一。

七月歸二大村一、八月爲二五教館助教一、作二郷村記序一。

正月于三役於浪華一、六月歸二大村一、八月命入二後機隊一、會長崎告レ警、出屯者五日、十月再命爲二教授一、先レ是教授以下至二學頭一、更番日往二武館一講レ經、君以爲往教非レ總、因辭不レ可、乃免二教授往講一。

命進二近習番頭格一、轉入二旗下隊一、九月上書陣二四事一、一曰賞罰、二曰賄賂、三曰著侈、四曰禮節、十一月以三特旨一參二政務一、作二松本奎堂本間丞說等傳、左傳集厥序一。

八月奉レ命使二島原一、作二俾林光平傳、金蘭詩序一。

作下復二廣瀨雄孝一書、涉史偶筆序、橋本大路傳上。

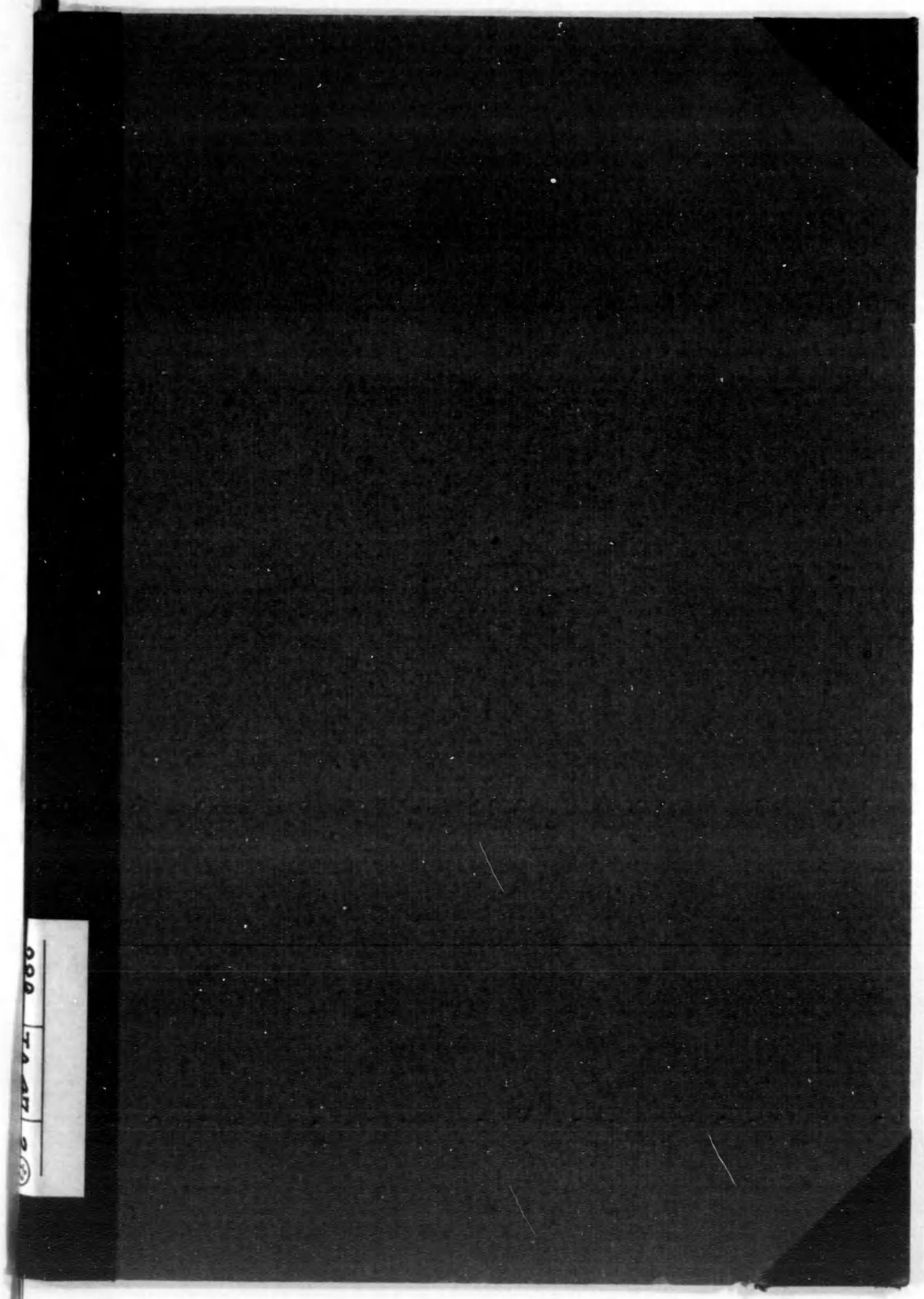
正月三日卒

弟　義規子則輯

930
116

製本控

930 函	116 號	年 月 日
購之以後、 昌平の泰斗塩野長英先生の 碑文を讀む		1 冊
備考		

980
116

終